

機関番号：32618

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720124

研究課題名（和文） 近代日本語におけるテンス・アスペクト・モダリティ形式の変遷に関する記述的研究

研究課題名（英文） A Descriptive Study on the Development of Tense, Aspect, and Modality Forms for Last 500 Years

研究代表者

福嶋 健伸（HUKUSHIMA TAKENOBU）

実践女子大学・文学部・講師

研究者番号：20372930

研究成果の概要（和文）：～テイル、スル、～ウ・～ウズ（ル）によって構成される中世末期日本語の体系を明らかにした後、「～テイルの発達」「動詞基本形の〈未来（以後）〉への移動」「～ウ・～ウズ（ル）の減少」「～タの〈過去（以前）〉形式化」という近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を記述し、その背景として、「～テイル」の発達によって<状態－非状態>というアスペクト体系が獲得され、それに伴って<現在><過去><未来>がほぼ専用の形式で表し分けられるようになったこと」と「主節の従属節に対する支配が強くなったこと」の2つを指摘した。これらの成果により、当初の目的を達成したといえる。

研究成果の概要（英文）：My main topics of this research are the following: (1) research on the tense-aspect-modality system of Late Medieval Japanese, and (2) research on the development of tense-aspect-modality system in Japanese.

The Late Medieval period can be said to be a very important period for the history of Japanese tense-aspect-modality system, because it is the turning point from Old Japanese to Modern Japanese. In spite of its importance, however, Late Medieval Japanese tense-aspect-modality system had not been researched very much, and for this reason, it had been impossible to examine the development of Japanese tense-aspect-modality system.

Therefore, firstly, I researched Late Medieval Japanese system, and made it possible to compare the tense-aspect-modality system in Late Medieval Japanese and that in Modern Japanese. Secondly, I described the development of tense-aspect-modality system in Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学・日本語史

キーワード：(1) テンス (2) アスペクト (3) モダリティ (4) 文法化(grammaticalization)

(5) 意志・推量表現 (6) 存在動詞・存在表現 (7) ～テイル・～テアル (8) 類型論

1. 研究開始当初の背景

申請書に記した通りである。主に欧米諸語においてテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにする研究が盛んであり、大きな成果が挙げられていることがよく知られている。しかし、アジア諸語、特に日本語においては、当該体系の変遷に関する研究は事実上皆無である。国際的レベルから見ると、日本のこの研究状況は大幅に遅れており、早急に研究を進める必要がある。本研究はこのような研究動向を踏まえ、「近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにする初めての研究」として位置づけられるものであり、加えて、国外の研究動向を踏まえ、アジア諸語で初めてテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにする研究の第一歩として位置づけられる。本研究の類型化が成功すれば欧米諸語中心の既存の理論に大きな影響を与えることになるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにすることである。従来のテンス・アスペクト・モダリティ研究は現代語日本語が中心であったため、「～タ」「～テイル」「～ウ」等の形式によって構成される近代日本語の体系が、どのような変遷をたどってきたのかという点は全く不明であった。そこで、中世末期日本語を出発点とした、近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにしたいと考え、研究に取り組んできた。これまで3回の科学研究費の交付を受け、近代日本語のスタート地点ともいえる中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系を明らかにし、複数の審査付き学会誌を含む計20本の研究成果を発表してきた。これらの研究を踏まえることで中世末期日本語から現代日本語までの変遷を記述することが可能になったので、これを目的とし申請を行った次第である。

3. 研究の方法

従属節と主節の両方に着目し、広くデータを集めた。従属節に着目したことにより、解釈の揺れが少ない、安定したデータを得ることができた。加えて、特定の形式のみに着目するのではなく、当時の体系を形成する全ての形式に着目して、データを採集した。具体的な形式は、～テイル、～テアル、～タ、動詞基本形、～ウ、～ウズ(ル)である。このような方法をとることにより、例えば、「～ウズ(ル)」が連体節に見られるのは、～ウズ(ル)には連体節に入れるような要素がある

からだ」というような循環的な説明を、こえた記述が可能になった。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果 1 (概要) : ～テイル、スル、～ウ・～ウズ(ル)によって構成される体系を明らかにした後、「～テイルの発達」「動詞基本形の〈未来(以後)〉への移動」「～ウ・～ウズ(ル)の減少」「～タの〈過去(以前)〉形式化」という近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を記述し、その背景として、「～テイル」の発達によって〈状態-非状態〉というアスペクト体系が獲得され、それに伴って〈現在><過去><未来>がほぼ専用の形式で表し分けられるようになること」と「主節の従属節に対する支配が強くなったこと」の2つを指摘した。

(2) 研究の主な成果 2 (体系の素描) : 近代日本語のスタート地点ともいえる、中世末期日本語の体系を素描すると、次のようになる。

未来 : ～ウ・～ウズル (若干、動詞基本形)
現在 : 動詞基本形 (若干、～テイルと～テアル、～タ)
過去 : ～タ

近代日本語のスタート地点では、～テイルという形式は、まだ、存在動詞イルの意味が、比較的強く残っており、守備範囲は広くはない。その守備範囲の狭さを補うようにして、動詞基本形(スルの形)が、〈現在〉の領域に分布しているといえる。つまり、現代日本語の感覚で、「走っている」のように、～テイルを使用する場面で、約400年前の日本語では、「走る」という形式を用いているということである。また、これと連動し、現代日本語においては、「スル」という形(動詞基本形)は、概ね、〈未来〉を表すわけであるが、約400年前の日本語では、〈現在〉に分布しており、〈未来〉にはあまり分布していない。では、約400年前の日本語において、どのような形式が、〈未来〉を担っていたのかというと、～ウ・～ウズ(ル)のような意志や推量を表す形式が、〈未来〉を担っていたのである。

(3) 先行研究との異なり : 中世末期日本語、つまり、約400年前の日本語では、「殺さう事(現代日本語で「殺す事」の意味)」「遭わうずる事(現代日本語で「遭う事」の意味)」のように、連体節内に、～ウや～ウズ(ル)等の形式が出現することが知られている。従来の研究では、この理由を、～ウや～ウズ

(ル)という形式それ自体に求めていた。つまり、～ウヤ～ウズ(ル)には、連体節に入り得る要素があったという方向での説明である。この説明自体が誤っているわけではないが、本研究で明らかになったことは、「殺す事」というような意味を表現したい場合、そもそも、当時の言語体系では、動詞基本形を〈未来〉に使うことが難しい、ということである。〈未来〉のことを表現したい場合、動詞基本形ではなく、～ウヤ～ウズ(ル)を使用する必要があったわけであり、連体節内に、～ウヤ～ウズ(ル)等の形式が出現するということは、実は、当時の言語体系の中に解消されることなのである。

(4) テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷が記述可能になったこと：近代日本語のスタート地点ともいえる、中世末期日本語の体系が素描できたことにより、「体系の変遷」を考えることができるようになった。中世末期日本語から現代日本語への変遷には、「～テイルの文法化(現在(同時)の領域での拡大)」「動詞基本形の分布が、現在(同時)から未来(以後)へ移ること」「～ウ・～ウズ(ル)の変化、～ダロウの台頭(連体節内に分布しなくなることや、意志/推量の意味に特化すること等)」という大きな変化があるが、本研究の成果により、これらの変化を(単なる偶然ではなく)体系的に解釈するという視点が得られたわけである。本研究のように、体系的に考えなければ、統一的な視点が得られず、個々別々に、形式ごとに記述する他ない。この点、研究上の進歩があったといつて良いであろう。

(5) 体系の変遷の背景：近代日本語における、テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷の背景としては、「『～テイル』の発達によって〈状態-非状態〉というアスペクト体系が獲得され、それに伴って〈現在〉〈過去〉〈未来〉がほぼ専用の形式で表し分けられるようになること」と「主節の従属節に対する支配が強くなったこと」の2つが考えられる。前者に関していえば、～テイルの発達は、〈現在〉というテンス的意味を表す専用形式の獲得と考えられるという見方である。結果として、現代日本語は、テンス的意味を、形式によって表し分けるという性質の言語になっている。後者は、中世末期日本語のテンス体系が絶対テンスに偏ることと連動した解釈である。より詳しく述べると、当時は、従属節の従属度が低く、主節と近いような様相をていた部分があったと考えられる。そのため、当時の従属節のテンスの体系は、主節と同様、発話時を基準とした絶対テンスだったわけであり、また、連体節内にも、～ウヤ～ウズ(ル)が出現しやすい状況であったとい

うことである。それが、従属節の従属度が上がってくるにつれて、テンス体系は、主節に集約される相対テンスに傾いてくる。それと同時に、モダリティ形式も、主節に集約され、従属節に現れにくくなるという解釈である。

(6) 今後の課題：本研究の今後の課題としては、「連体節内にモダリティ形式が現れやすい言語は、絶対テンスに偏るのか」「言語変化のパターンとして、〈現在〉を獲得するというパターンの言語は、どのくらいあるのか」等のことが挙げられるが、これらの課題は、日本語を見ているだけでは解決がつかないものである。今後は、Cross-Linguisticsとのインタラクションを考える必要がある。

(7) 得られた成果の国内外におけるインパクト：国内に関して述べると、2008年度の成果は、日本語学会での学会発表(於：日本大学文理学部)、2009年度の成果は、学界で最もレベルが高い審査付き雑誌の一つ、京都大学『國語國文』(80-3)での論文掲載と、毎年の成果を、着実に公表して評価を得ている。加えて、本研究の重要性は出版社にも認められており、既に、『日本語文法史研究の最前線』(ひつじ書房、2011年秋刊行予定、仮称)に、「～テイルの成立とその発達」というタイトルで、論文の掲載が決定している。ここにおいて、3年間の成果をまとめて発表することになる。国外に関して述べると、本研究の成果により、「近代日本語の歴史的変化を類型論的な観点から記述する」という研究が現実的なものになったわけだが、この類型論的な研究を確実に進めるべく、アメリカ合衆国シアトルにある University of Washington の Department of Linguistics の Visiting Scholar に応募したところ、採用され、2011年度は、Visiting Scholarとして、シアトルで研究を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 福嶋健伸、「～テイルの成立とその発達」、『日本語文法史研究の最前線』、ひつじ書房、審査有、2011年秋刊行予定

② 福嶋健伸、「中世末期日本語の～ウ・ウズ(ル)と動詞基本形—～テイルを含めた体系的視点からの考察—」、『國語國文』、査読有、Vol. 80, No. 3, 2011, pp. 44-64.

[学会発表] (計2件)

①福嶋健伸、「～テイルの成立とその発達 — 「通説を覆す説」を覆す—」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 NINJAL共同研究発表会「日本語文法の歴史的研究」、2011年3月7日、於：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 1 F 中会議室2。

②福嶋健伸、「中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）の分布について—動詞基本形および～テイルとの関係に着目した体系的考察—」、日本語学会（旧称：国語学会）、2008年5月18日、於：日本大学文理学部キャンパス

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福嶋 健伸 (FUKUSHIMA TAKENOBU)

実践女子大学・文学部・講師

研究者番号：2 0 3 7 2 9 3 0

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし